

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	商学研究科
大項目	6 教育内容・方法・成果 (研究科)
中項目	6.4 成果
小項目	6.4.1 教育目標に沿った成果が上がっているか。
要素	学生の学習成果を測定するための評価指標の開発とその適用 学生の自己評価、卒業後の評価(就職先の評価、卒業生評価)
小項目	6.4.2 学位授与(卒業・修了判定)は適切に行われているか。
要素	学位授与基準、学位授与手続きの適切性 学位審査および修了認定の客観性・厳格性を確保する方策(院)(専門)

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
 B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
 C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
 D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 前期課程、後期課程において安定的に一定の修了者を輩出する。	→学位の授与数。	A	A	A	A	A
2. 学会発表の包括的支援を拡充する。	→大学院生の学会発表回数。	B	B	B	B	B

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 修了要件および学位授与方針を明確にし、在籍学生に周知している。前期課程・後期課程とも、研究演習を通じ指導教授によって学生の学習成果を判断し、適切な研究指導に努めている。特に研究職コースでは、定期的に指導委員会による指導を行い、進捗度の確認報告とともに研究指導の改善に努めている。 修士学位の授与については、複数の教員による論文審査・口頭試問を実施し、2011年度よりその評価を成績として明示している。修士論文の審査にあたっては審査委員会に専門分野外の副査を1名必ず入れることで透明性と公正性の向上をはかっている。課程博士の授与については、専門科目主分野および外国語の学力試験合格者からの申請に基づき、公開報告である課程博士候補者試験(概要報告プレゼンテーションと口頭試問)を行った後に博士学位申請論文について専門分野外副査1名を含む3名の審査委員会報告を経て、最終的に研究科委員会で審議される。学力試験、公開報告、専門分野外副査の導入などで客観的で公正な判定に努めている。これらのプロセスは履修案内などで学生に公表、周知されている。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 修士学位授与数は、2009年20名、2010年23名、2011年16名、2012年23名、2013年14名と安定的に推移している。博士学位授与数は、2009年度1名、2010年度4名、2011年度2名、2012年度5名、2013年度2名であり、2008年度以前よりも増加するとともに、安定的に推移している。ただし、前期課程・後期課程ともに定員を充足していない状態が続き、受験者・入学者に減少傾向が見られるため、入学者の確保が喫緊の課題である。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 入学者の確保に努めるとともに、より適切な学習指導・研究指導のに向けた改善努力を行うこと。	☆
		その他	☆

目標2	B	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 2009年度と2010年度は大学からの予算減額措置により国内学会での報告に対する補助は行えなかったが、2011年度と2012年度春学期は大学の教育活性化資金を利用し、2012年度秋学期以降は商学研究科予算により、大学院生の国内学会発表の旅費補助を行った。商学研究科予算減額により財政的には困難であるが、国内学会補助を継続するよう努力している。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 2011年度は5名、2012年度は4名の学生が本制度を利用して学会報告を行った。2013年度も複数名の学生が国内学会で報告を行ったが、本制度への申請はなかった。学会開催地が遠隔地でなかったことが理由の1つと考えられる。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 大学院生からの要望の多い支援制度であるので、大学への予算化を要求したい。	☆
		その他	☆
			☆
備考			☆